



大島さんと、アカネ号（ゴールデン・レトリバー、♀、11歳）、ウルメ号（ボーダー・コリー、♀、6歳）



大島さんとアカネ号が、被災地で実際に救助にあたっている様子

災害救助犬とは、災害の現場でどのような救助にあたる犬なのでしょか。  
RDTA 救助犬訓練士協会会員の大島かおりさんにお話を伺いました。大島さんは災害救助犬を育成し、実際にご自分の育成した災害救助犬とともに災害現場に出動し災害救助にもあたられています。

インタビュー

# 救助犬の育成に携わって



## 大島 かおりさん

大島ドッグトレーニングスクール所長。鹿児島県出身。1989年大島ドッグトレーニングスクールを開設。

- 訓練資格  
国際救助犬連盟公認審査員／ジャパンケネルクラブ訓練士／日本警察犬協会公認2等訓練士／日本シェパード犬協会公認1級訓練士／神奈川県警察本部嘱託警察犬指導手／海上自衛隊・台湾消防局 救助犬育成指導／専門学校「ビジョナリーアーツ」非常勤講師

## 救助犬の必要性

——救助犬を育成しようと思っ  
たきっかけはなんですか？

**大島** 『犬とできる社会貢献』  
ということについてはずっと  
考えていました。1980年代  
には救助犬の存在を知りました。  
強く認識したのは、1995年  
の阪神淡路大震災です。災害救  
助犬はやはり必要だと思ったの  
は、1997年の鹿児島市出水  
市を襲った土石流災害のときで

す。このとき、指導手3人で3  
頭の災害救助犬を連れて、陸路  
被災地に向かいました。そして、  
被災地で実際に目の当たりにし  
たのは、人手に頼る捜索でし  
た人が一列に並んで、土砂に棒を  
差し入れて被災者が埋もれてい  
ないか調べているんです。一歩  
一歩、歩を進めて捜索する様子  
を見てとても驚きました。と言  
うのは、それまでは被災者の捜  
索はもつとハイテクが導入され  
ているものと思っていたんです。

人の感覚を頼って捜索する様子  
を見て、犬の優れた感覚、嗅覚  
や聴覚を被災者の捜索に利用で  
きると確信しました。



大島ドッグトレーニングスクール

## 民から官へ働きかけ

——救助犬と活動をする中で感  
じたことは？

**大島** 実際に災害救助犬として  
活動するにあたって、被災地に  
入るのに『許可証』が必要にな  
ったり、陸路で行くには時間が  
かかり過ぎるなどの問題点があ

りました。自衛隊、警察、消防  
と連携を取らないと実際の活動  
はなかなか難しい。今では、自  
衛隊、警察、消防などと連携が  
でき、被災地にヘリコプターで  
向かうことが可能になりました  
が、当初は、こちらから働きかけ、  
災害救助犬の実用性を説明して  
理解を得てきました。（災害救



助犬はケージに入れずにリード  
をつけて直接乗り込みますの  
で）「ヘリコプターに乗せたと  
き、犬が操縦席に乱入しない  
か」といった懸念にも、実際に  
訓練をすることで理解を得て  
きました。

## 犬による人命救助

——災害救助犬は現場でどのよ  
うな作業をするのですか？

**大島** 被災地で捜索にあたる  
とき、災害救助犬は『生体臭気』、  
つまり生きている人間から発生  
する臭い、しかも隙間から漏れ  
出てくる臭いを嗅ぎつけ、瓦礫  
に埋もれている被災者を探し出  
します。災害の現場には、捜索  
にあたってはたくさん人間の  
からも臭いは出ていますし、現  
場にあった食べ物等の腐敗臭、  
瓦礫から出る悪臭等、色々な臭  
いが立ち込める中、『生体臭気』  
のみを嗅ぎ分けられなければ人  
命救助にはつながりません。原  
臭（衣類などについていたその人の  
臭いを嗅がせて）を辿ってその  
人を探す警察犬の行う探索と  
はこの点が大きく違います。ま  
た、被災地では人がたくさんい  
たり、重機などを使って作業し  
ていることもあったりと、騒音  
も多く、それらに動じないこと  
も必要になります。